

一瞬にして戊辰戦争を駆け抜けた
「十六ささげ」隊を
調査する。

藤原尚彦

白河藩と棚倉藩を往来した
幕末志士たちの
生きざまがそこにあった

筆者プロフィール
藤原尚彦

幕末白河棚倉の戊辰戦争～明治期を中心に研究。郡山で今泉正顕氏に作家・星亮一氏を紹介され、戊辰戦争研究会へ参加。白河への転勤により、地域の方々への御恩返しに趣旨を変えて取り組む。白河地域歴史研究第一人者、金子誠三氏との出会いから調査の幅を広げて郡山→白河→那須→棚倉→磐城平→福島市に住みながら、現在も研究を進めている。御昼休憩時間の墓地散策で、有力情報発見をしていた事から金子翁に「墓場の鬼太郎」と名付けられる。

令和3年2月
発行・制作 一般社団法人ニワトコ
福島県地域創生総合支援事業

城下町で「十六ささげ」隊を探す

『仙台島に十六ささげ、なけりゃ官軍高枕』当時官軍兵士が歌い、民衆（奥州白河藩と棚倉藩界限／現福島県）の里謡として伝わる「十六ささげ」隊。大正期に情報が現れ始めるこの部隊は、未だその詳細が不明なまま、語り継がれています。

〈十六ささげとは、白河地方で栽培する大角豆^{ささげ}の一種である。棚倉藩十六人組を指す。棚倉十六人組は洋式の軍装によらず、我が国古来の戎衣兵器^{じゅうい}を用い、甲冑に身を固め槍・弓矢での装束であったという〉
『戊辰白河口戦争記 復刻』（佐久間律堂著 訳注 井上幸雄 金子誠三）より

実質二日か三日の短い期間ではあったのですが、強い印象が残されています。

東北戊辰戦史では、他にもその名が伝えられる部隊が数多くあります。

会津白虎隊（幼年藩士で構成）

二本松少年隊（藩士幼年子息で構成）

白河新選組（会津・箱館などと変化する）

仙台からす組（須賀川の博徒などで構成）など。

これより、「十六ささげ」隊とは、どのような背景や経緯で結成されたのかを聞き取り調査や文献をもとに足跡をたどっていきます。

本文の構成は第一部、第二部、第三部からなります。

第一部では

「十六ささげ」隊構成員について。

第二部では

阿部家十六代、白河藩主阿部正外^{まさと（とう）}と棚倉藩家老・阿部内膳^{ないぜん}一族について示し、「十六ささげ」にまつわる地域伝承を諸々の関係資料から精査します。

第三部では

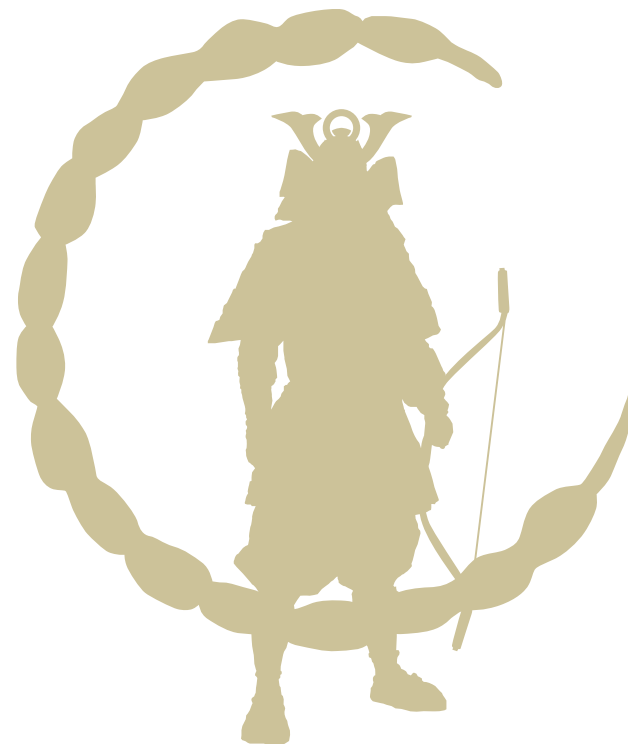
「十六ささげ」成立に関わる三名について。

旧棚倉藩士 安川繁成^{やすかわしげなり}

阿部家大奥殿、薩摩藩島津家出身 聰徳院^{そうとくいん}

阿部家一門 阿部正脩秋風^{まさなかしゅうふう}について。

終わりに、阿部家最後の老中正外について再考します。



【第一部】 隊士情報精査

「十六ささげ」隊は、江戸から明治への変遷期に起きた戊辰戦争の状況下で生まれました。彼らは白河藩と棚倉藩（現福島県）の藩主だった阿部家の家臣として「白河口の戦い」に出陣しました。

隊士については下記資料から（表1）にまとめました。

天保八年（1837）

『由緒書覚』（藩士先祖書）

慶応二年（1866）

『阿部氏分限帳』

明治元年（1868）

『旧棚倉藩士 中島久家文書』

（明治元辰年十一月羽州山ノ辺辰六月廿四日棚倉城落後引揚者控）

明治四年（1871）

『旧棚倉藩主阿部氏家臣禄高覚帳』

明治十三年以降

『阿部内膳正熙』墓碑より「謀建之者」

明治三十一年（1898）

『家禄不足額給与願』

また隊士名・担当については、往時の記憶に近い大正八年（1919）刊『東白川郡史』から、読み仮名については『由緒書覚』（藩士先祖書 学習院大学）を採用しています。

一覧表の情報から分析すると、一小隊としての品格保持の為、その道のエキスパートで編成されています。

馬全般の作法や乗馬のスペシャリスト、宮崎。父阿部秋風と内膳補佐役の有

田父子。軍務中枢から須子。政務中枢を担う家臣の息子達が名を連ねる御本城番並の志村・山岡・北部・岡部。正外側近から富田。戊辰戦争直前に保原陣屋領代官に急遽昇格した村社喜三郎の息子、勘蔵。功を挙げて昇進を信じたであろう野寺・大輪・湯川・鶴見・梅原。譜代・家禄情報の無い川上は他藩の外交役か、といった事が伺えます。なお、補足情報として隊士禄高で分け、分析したものを添付します（表2参照）。

隊長 阿部内膳について

〈正備様御代 弘化四未年三月廿二日、父右近儀隠居蟄居被り、私に家督六百石の内四百石仰せ付けらる。同年十月十五日父右近蟄居御免に罷成候〉『公余附録八』

父秋風からの代替わり時期を特定

〈正耆様御代 嘉永六丑年十月廿二日磐城海岸異国船渡来に付き（省略）大筒役戦士を兼ねて出役〉『公餘附録八』（御家中諸士由緒抜書 川澄次是著）より

ここで実戦に備えた訓練をしています。そして、

〈棚倉藩の将阿部内膳は桜町口を守った所謂十六人組の勇将であったが、奮戦負傷し金勝寺方面に避難し遂に倒れた。金勝寺に避難する時、白河中町 の商人五十八歳の小崎直助が力を添えて阿武隈河を越したという美談が今に伝わっている〉『戊辰白河口戦争記 復刻』（佐久間律堂著 訳注 井上幸雄 金子誠三）

決死隊とも伝わる『十六ささげ』で戦没したのは内膳のみです。またその遺骸の取扱いは同年六月十二日白河合戦坂の戦いで亡くなった棚倉藩正規軍御

番頭権田東左衛門(墓は奥羽越列藩同盟軍議所だった、棚倉町臨済宗降福寺境内。昭和十五年の棚倉大火で本堂焼失のため記録は追えず)への扱いとは異なり、打ち捨てられていた様な状況であったと伝えられています。内膳は棚倉藩総大将なのに御付きの者も無くなぜ民間人が救援していたのか、疑問が残ります(別説あり)。

有田内記について

阿部家十五代藩主正耆時代、現在の西郷村下羽太で戦国時代をおもわせる軍事訓練を開催。旗本、鉄砲、弓、槍持、馬印持、提灯持等で編成された隊(嘉永六年十一月)、総勢八十八名を御者頭として取り仕切りしました。文久三年三月、幕府から江戸警衛を要請された際には、人員総出の治安維持対応を担当し藩軍政のトップ、御番頭を務めました。正外時代のオランダ式兵制導入について、家祖伝来兵法に対する無礼ではないかと抗う姿勢が想像されます。秋風とは同世代。

川上直記について

禄高、家臣系譜、分限情報の全く無い彼は、棚倉藩士ではありません。近隣での最終的な川上直記に関する記述は、左記の通りです。

〈敗兵を名乗る賊徒が路銀や食料を求めて絶えない為、これ以上は、と音を上げた村々は遂に訴状を隣の棚倉藩に提出、対応を申し出た。ところが棚倉藩では川上直記という侍を仙石役所に寄こし、官軍は平潟表に上陸し(中略)戦争が生じている。徳川家再興を期している棚倉藩としては取締りの士に不足しているので、むしろ御齊所・荷路夫両

道の警固こそ肝要であるから農兵をもって守るように、といわれてしまったと。二十四日棚倉藩の郡奉行臼倉國蔵・代官長谷川林右衛門が供廻り五人をつれて、仙石御役所にきて『古殿町史』(旧小見川藩仙石陣屋記録)より

この記述から読み解くに、他藩陣屋領民を他人事のようにあしらう川上は、共も連れず官軍勢が大挙している平潟方面に単身で向かっている事が判ります。この頃、官軍勢で「川上」姓の藩主支流家臣が居るのは「薩摩藩島津家」のみでした。『薩摩藩家老の系譜』林匡著



絵：「十六ささげ」隊の出で立ち予想図
『五十畑繁次郎 追想記』より転載

【第二部】^{ようしし}養嗣子藩主へ、分家一族の確執

「十六ささげ」隊が誕生した背景にあるもの

正外と内膳は、藩祖忠秋～六代目藩主正敏の血を受け継いだ血脈末裔です。しかしながら二人には、その生い立ちに大きな違いがありました。

前者は分家旗本（現代でいう国家公務員一種）から奉行（現代で言う省庁官僚）、急遽本家相続となり城持譜代大名（現代で言う都府知事）。歴代当主、家臣達の悲願であった幕閣老中（現代で言う内閣大臣）入りを果たします。

後者は藩主一門末裔で城代家老（現代で言う県職重役）。^{おし}忍藩（現埼玉県行田市）から白河藩への領地替えに伴い内膳の父阿部右近正脩（後の秋風）は、江戸詰めから白河城家老職へ左遷されますが、歴代養嗣子藩主に寄り添い、^{ひつ}殿様と奥方様を支える一族分家老臣として重用されていました。しかし年々逼迫する白河の財政難には重役ながら関与しませんでした。そもそも正脩は忍時代、最後の藩主正権の身代わり（歳の差三歳）を、宗家の福山藩阿部家指示のもとで経験しています）『公余録』と（「白河藩主阿部家の歴史」阿部家第二十二代当主阿部正靖氏講演 財団法人 立教志塾発刊『立教』二〇一〇年六月 No. 246）より

正脩は宗家が選んだ身代わりにふさわしく、聡明かつ容姿端麗、殿様養育の環境に近い江戸藩邸育ちであり、兄3人（平田弾右衛門・松林紀兵衛・森野小左エ門）の支援で周囲の家臣達まで、正脩の藩主就任を切望したようです。それほどまでに、藩主のような貫禄があったと推定されます。白河領前任の幕閣老中・將軍補佐を務めた松平定信への憧憬とも受けとれるような、文人大名として余生を領内で過ごしたと伝えられています。『三百藩家臣人名辞典（新人物往来社刊）その優雅さとは裏腹に藩財政の一部は、白河・須賀川の領内商家への借財頼みで運営する有様でした。みずごしは出来ない、

肥前大村藩主世子で養嗣子となった十三代当主阿部正備^{まさかた}は、実兄で肥前大村藩十一代藩主大村純顕^{すみあき}にならい、藩財政健全化の大改革を断行。この結果、正脩は裁きを受け、隠居蟄居を命じられています。そして息子内膳が代替りし、後に藩政入りをしています。なお、正外の実の祖父は、正脩の腹違いの兄正良です。

この関係性を踏まえた上で、各伝承を確認していきます。

「古式由来の装束」について

下記①②の記述からは、執筆者の偏った思いが汲みとれます。本文では対比を強めるためか、連なる文章として記されています。

①^{おらんだしきそうれん}和蘭陀式操練

〈正静の族阿部葆真（葆真=正外、正静父）、外国の事に通ず、従来の兵制を^{あらた}革め、和蘭陀式と為し、自ら、騎して、兵を操る、用ゆる^{ところ}處の砲銃を始め、服装を悉く洋風とし、一も古體を存せず、呼んで開化と云う〉

②^{こそうじゅうろくし}古装十六士

〈別手隊長有田内記等、十六名、^{がん}頑として洋化^{しりぞ}を斥け、特に乞ふて一家伝来の鎧甲冑^{よろいかつちゅう}を着け、金光燦^{きんこうさん}として、^{らんべい}蘭兵の間を縫ふ、最も衆目を惹きしと伝ふ〉『東白川郡史』

後者②が好意的に記されています。尚、「別手」について。「別手組」の場合は幕府が在留する外国公使等を護衛するために設けた組織を意味します。さらに言えば、日本武士が異国人にたいして、その^{きょうじ}矜持を体現する精鋭達をい

います。神奈川奉行や外国奉行の経歴から他国文化人へのあつかいに精通し、藩政軍務に反映させる正外と、旧徳川幕府軍を西洋かぶれと見すえて対峙する内膳・有田らの意気込みがうかがえます。余談ですが、孝明天皇の生前、信任厚かった京都守護職で会津藩主の松平容保についても、洋装での臨戦は見受けられません。きっと、攘夷指示に対する忖度であり、あるべき姿だったのでしょう。

内膳墓碑の墓法^{ぼのり}

ここにみる洋習・洋化・開化(=正外)に対抗する内膳らの強い思いは、隊士九名によって建立された墓碑に刻記されています。

嗚呼君常憤激干洋習惑俗

矢欲塞其流然而遂戦死乎

白川役哀哉與後嗣正 元相

(白河市常宣寺境内阿部秋風家墓域 阿部内膳墓)

古式由来へのこだわりは、同じ血脈で老中迄昇りつめた正外へのねたみからくるだけのものでしょうか。実は外国を毛嫌いする朝廷、天皇への忖度であり、それをあらがうように後付けで強調された感があります。同時期の他藩の状況から立証できそうですので、下記をご案内しましょう。

初戦大敗退の古式武装隊 東山道軍平川支隊

後に白河縣権参事として着任する平川光伸和太郎は、三条実美付きの元土佐勤王党员で脱藩浪士。彼と官軍を率いた香川敬三は、岩倉具視付きの志

士で元水戸の神官です。二人を軍監とする初期東山道軍は朝廷の威厳に満ちた装束の軍隊で、下総流山に潜伏していた新選組局長の近藤勇を投降させています。板橋の総督府本営に送られた近藤は後に処刑されました。その後、小山では甲陽鎮撫隊(大鳥圭介ら旧幕府伝習隊、土方歳三を最上位とする新選組、他)と交戦。平川たちは、威厳を笠に不戦勝で勝ち進んだそれまでとは異なり、初の本格的な戦いで大きく敗退します。この時の平川支隊に従軍した、笠間藩隊について下記の記録があります。

〈笠間藩隊は鎧・兜姿で槍を持った部隊が主力であったのに比べ、旧幕三隊の内の草風隊は、全員士官服を着て近代兵器を持った徳川家最強の部隊である。(省略)陣頭に立った笠間藩槍隊長川崎忠兵衛も、槍をしごいて散兵に立ち向かったが、黒糸威の鎧を見た旧幕兵は銃火を川崎に集中した〉『北関東戊辰戦争』田辺昇吉著

その後を比較するため、笠間藩の飛地^{とびち}、磐城平領隣にある神谷陣屋^{かべや}の戦争を確認しました。記録に先述の内容が触れられていましたが、当地の戦いでは本藩と官軍諸藩の応援について記述があるのみです。改めて混成軍の装備が同様に古式であったとは、記されていませんでした。この頃には、官軍上官達は洋装軍服に舎熊^{しゃぐま}と陣羽織をコラボレイトした装束に変化しています。初戦大敗退から「和魂洋才^{わこんようさい}」の精神で勝つために、洋式装備を朝廷に承認させたものとおもわれます。あれだけ攘夷を指示した洋式嫌いの朝廷を、実情に沿って説得したのでしょう。

なお、平川光伸は明治二年に白河縣着任後、現在の高知県安芸郡芸西村から妻を白河に呼び寄せています。数年振りの夫婦生活は、わずか数か月。妻の病死で終わります。幕末の勤王志士妻に対する顕彰が刻まれた墓碑が、白河天神神社麓の墓地に今も遺されています。

『明治戊辰ノ役白河棚倉間戦史』

〈十六人隊は棚倉藩でも英邁武道一辺の頑固の士で大の西洋嫌であった 西洋調練なぞには病氣と称して出た事なく 兎角命令を拒み 遂に同士二十余人窃に宇迦山に會合し密議をこらした。我々は日本武士である 然るに近年ますます西洋流熾に行はれ之を反くは不忠である 然し目の色の変った髪の赤へ毛唐人の鉄砲を擔て戦場へ向ふのは甚た遺憾の次第であり 心外の極である 依て各々の家禄を主君に返上し 更に家族一人に対し一日玄米五合づつを頂戴する事にし 又別隊を組織し 一方を受持 天晴君恩の萬分が一を報じよう。これが宇迦山密議の大要である〉(五十畑繁次郎 追想記 大正十四年八月)

現在、宇迦神社境内には「鎮護神」が鎮座しています。「鎮護神」とは、忍藩時代に藩主正敏が財政難にもかかわらず神事に予算をあて、藩内から反発をうけた藩祖阿部忠秋を本祭神とする信仰です。白河でも城内にあり、棚倉でも城内にありました。正敏血脈の内膳が率いる十六ささげと、現在の宇迦神社境内に鎮座する「鎮護神」を戦勝縁起として密議の場所にした、とするならば時系列で史実に反します。旧棚倉城からの移転は予算確定後の昭和七年。焼失した棚倉城跡地に鎮護神拝殿が再建されたのは明治四十四年でした。

『学習院大学資料館収蔵資料目録 第十七号』

『公余録』『棚倉町亀ヶ丘城公園鎮座鎮護神拝殿建築記念絵葉書』

追想記の執筆は大正十四年のため、宇迦神社との関係に矛盾が生じます。頑固で古式由来にこだわり、リーダーが内膳であれば鎮護神に祈願するのが自然です。古刹馬場都々古和氣神社では日光東照宮分祀があり、棚倉城内

の鎮護神拝殿では正外が居城しているのでこれも考えられず。官軍として天皇をあがめるならば古刹八槻都々古別神社が考えられますが、往時の棚倉～水戸街道は水戸天狗党関係の往来に監視が張られ、その結果の宇迦神社かもしれません。

しかし同時期、より強く宇迦神社へ滞在参拝を望んだ十六～二十余人がいました。旧幕閣老中小笠原長行の一行です。慶応四年三月十二日棚倉入りし潜伏(近津 野中家久慈川向にあった藩主御用達別邸雲錦亭・仙壺亭)。その後、湯岐温泉へ。四月一日には棚倉城下を出発し、七ヶ宿での奥羽列藩同盟会議にかかわり、函館五稜郭まで赴きました。宇迦神社参道には小笠原家が棚倉藩時代に寄進した石灯籠が残っています。また、近くには菩提寺の長久寺があり、常隆寺には棚倉重臣達と家族の「永代祠堂」などがあり、往事に想いをはせることができます。当時江戸から棚倉までは陸路で九日程かかっており、十六ささげ隊は東山道軍と共に北上していたと考え、棚倉城下には戻らず、白河で合流していたのではないかと考えています。

棚倉町亀ヶ丘公園鎮座鎮護神拝殿建築記念葉書ヨリ

(解説) 奥が拝殿、手前では奉納相撲が行われている。小雨の中での観覧客、旧棚倉城跡地にて 明治44年



【第三部】 十六ささげ成立の関係者

外交問題で朝廷に幾度も赴いていた老中正外たちとは別に、京師・官軍と調整をすすめる初期要請内容を把握・藩内調整していた輩の存在が考えられます。

棚倉藩士 安川繁成^{やすかわしげなり}

「安川繁成」においては、生まれが群馬の郷土四男で、江戸で勉強をしたいと白河藩士安川家に婿養子入り。幕府最高学府昌平黌、本郷丸山福山阿部侯藩邸、大鳥圭介私塾、後の慶應義塾となる福沢諭吉に私費で就学（藩は助成金対象外としました）。明治元戊辰年四月に退塾し、棚倉藩の外交方留守居役に大抜擢されます。そもそも『大殿様御方様奥頭取』として禄高米十八俵二人扶持、他八俵（慶応二年。『他八俵』は婿取りの場合の舅の禄）でしたが、明治四年九月の棚倉縣調査では奥頭取 安川文九郎として禄高百石に藩内随一の飛び昇給をしています。そのきっかけは、左記に見受けられます。

〈奥羽各藩同盟して以て王師に抗す、君が藩主美作守亦既に國に就き同盟に投ず、君幸に在府せしが憤然として聡徳院殿（島津斉彬、久光の叔母）及び在府の重臣に説いて曰く、徳川氏大局を総理する殆ど三百年其功績偉大なりといふべし。然れ共今や末路擾々如斯復之を維持するに由なし、縦令太守は既に國に就く共在府の諸士は宜しく勤王一意又他あるべからずと、院殿及び重臣之を入れて可とす、君於是断然決意在府青年の士を糾合して二小隊を編成し、之を以って奥羽に出兵し我藩勤王の實を挙げて以て藩主が國に就き官軍に抗するの罪を謝せんと謀議し、その意を当時矢部大輔大村益次郎氏に致す、其誠意又他疑なきを察し之を許容す、君欣然藩邸に帰り具に顛末を復申し因州の隊長河田佐久馬に従い奥州に出兵せんとす、然るに愚味の徒

は以て我が主君に弓を弾くとし応募を拒むもの頗る多く僅々同志十六名に過ぎざりしといふ。君当時の遺憾果たして幾何ぞや」『衆議院議員列傳』明治三十四年三月発行。

安川は就学に際して藩から支援が貰えない事に憤るだけでなく、ならば自費でとことん世相を学び考え抜いてやろう、と行動した人物です。明治十七年南湖（白河市）に建立された「鎮英魂碑」にも、その名が見受けられます。碑背面には建碑発起人として内膳従兄の平田文左衛門を筆頭に、旧棚倉藩士達が名を連ねます。最後に控えめに従五位 安川繁成の銘が刻まれています。唯一の官位付、しかも藩主より上位。これが彼の矜持であり、既得権に甘んじて来た譜代士族たちとの違いを誇示したものと受け取れます。また同面の「故棚倉藩殉難士」では最初に阿部内膳の銘が刻まれ、その隣には京大阪で正外の右腕として活躍した軍政トップ権田東左衛門の銘が刻まれています。

京都の正外に随行していた実質的軍事部門トップ、権田東左衛門。正外の指示で京・大阪で待機していた藩首脳陣から足輕・士卒一同迄、即刻白河に引き上げる旨、右腕であった東左衛門に指示、対応を申し送るのでした。

『公余録』から

戊辰戦争終結後に御家断絶の咎めを受けた内膳家は、官軍に対する反逆首謀者ではなかった事が証明されました。つまり、「鎮英魂碑」で内膳を称えるべく綴られた碑文は、まさに彼の魂を鎮めるためであり、この結果に至らしめた首謀者安川の、明らかな保身がうかがえます。おかげで後に、渋沢栄一と日本鉄道会社で関わる事で知識を得て、その後、白棚鉄道開設でも関わります。

第一次長州征伐に使用し、その後大阪から海運で江戸藩邸へ運ばれ保管さ

れていた棚倉藩所有の最新鋭武器。大小の砲や弾薬を安川は彰義隊が譜代大名家に貸与を求めにくるだろうと、長州藩の東征大総督府補佐大村益次郎に相談し、各種全数の半分ずつを朝廷に献納しました。後に精度の高い武器であったことから、彰義隊追撃に大変役立ったと大村より賞されています。大奥方様聴徳院の権威を背景に、薩摩藩経由で官軍中枢に関係を持った安川繁成。

薩摩にとって正外は、生麦事件の担当官僚だった事から疎まれており、朝廷に従わず奥羽列藩同盟に加わり、旧幕府側支援に動く正外らを叩く絶好の機会として安川は、聴徳院や薩摩藩の支援を得たと考えます。

しかるに聴徳院の権威を利用して「十六ささげ」を成立させます。朝廷に決死の覚悟を強調すべく十六名の命を皇軍兵として「捧げる」意志から「十六捧げ」の呼称となったと考えられます。この十六名は江戸藩邸内で正外に不満を募らせ官軍に組する事に賛同する者を集めていたものの、結局は十六名にしかならなかった、と記述にあります。

大奥殿、薩摩藩島津家出身 聴徳院

阿部家が忍から白河に領地替えとなり、藩主正権の死去により紀州徳川家から養嗣子に選ばれたのは、従兄にあたる正篤です。正篤の正室に迎えられたのが薩摩藩主島津斉興の妹 聡姫（正篤の死後、聴徳院）でした。伯母は徳川幕府十一代将軍家斉の正室広大院で、斉彬、久光の叔母であり、十三代将軍家定の御台所天璋院篤姫の大叔母でもあります。実家の薩摩藩邸が白河藩邸に隣接していたため、火災や地震の折は実家にもどる事が多く、また白河領内には数回しか来ていない御姫様でした。

白河境の明神に阿部家の「丸に違い鷹の羽」と、島津家の「丸に十文字」紋

が彫られている元治元年十二月建立の石灯籠があり、これは聴徳院奉納によるものです。同地には広大院の父で聴徳院祖父島津重豪に仕え、後に斉彬に仕える藩主側用人「薩州 伊集院中二藤原兼珍」の天保四年九月に奉納された石灯籠もあります。重豪が前年米寿を迎え、当年一月に亡くなった事から、寄進したものとおもわれます。

伊集院兼珍については、『鹿児島県史料集』（斉彬公史料）より

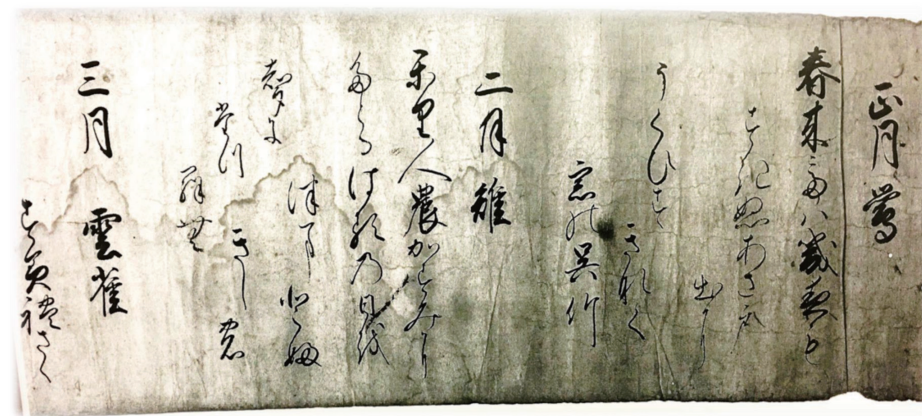
阿部家一門 阿部正脩（秋風）

第二部で先述の通り、他家からの養嗣子よりも、血の濃い別家の藩主就任に期待が寄せられた忍時代。文化六年六月に阿部内蔵允（藩主正敏の三男、のち平田弾右衛門任時）家の末裔家に対しては下々に至る迄、不敬の無いように、と御達しが下されます。文化十二年、足軽達の中で秋風ら江戸詰め末裔家の贅沢三昧を非難する捨文（怪文書）が回されました。文化十三年二月、藩主世子の弾右衛門任時が死去すると、五月、江戸表屋敷で任時の六男秋風に遺禄相続が決定され、二男の松林紀兵衛を後見役に、同腹の兄で五男の森野義三郎は、嫡男の平田弾右衛門重信と同居を指示されました。これに異を唱えた足軽達が幕府への強訴を目指し文政元年、行動を起こします。お家騒動としてお取り潰しにもなりかねない騒動粛清の為、文政二年取締りが行われています。クーデター側には桜井仁右衛門組足軽の沖田伊八の名が（沖田総司の父か）あります。捕縛され、一年近い裁判結果、沖田伊八は切腹を免れ、江戸詰藩士に昇進しました。忍城下を勇ましく日光に向かう「八王子千人同心」に惹かれたであろう幼き日の総司は、これがきっかけで日野にいたと考えられます。これが白河移封前の状況です。

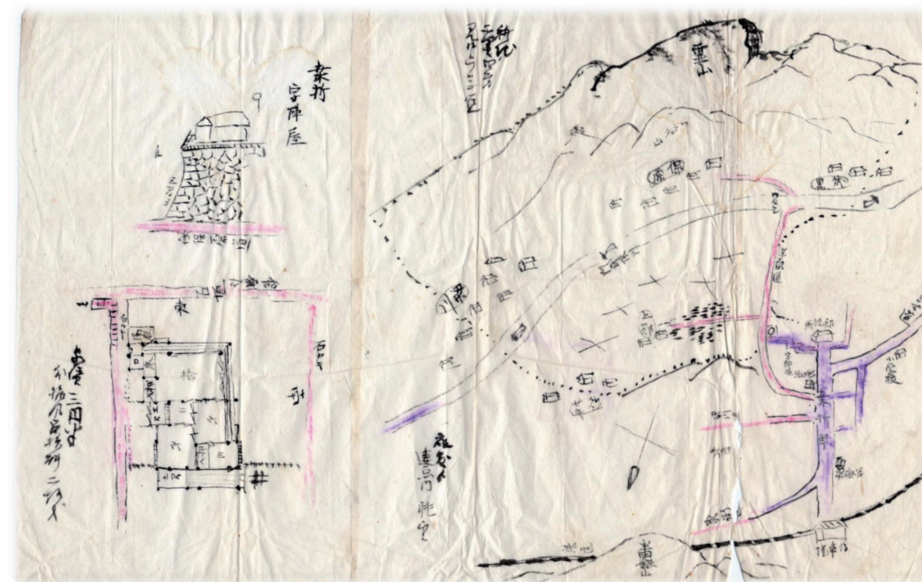
白河は、幕閣老中として名高い松平定信（白河楽翁）が余生を過ごした城下

町です。養嗣子として初めて白河入りした際の印象を『関の秋風』に著しています。当然、秋風は別家から藩主を目指し、譜代大名家の任地として上級の白河を事前学習していたとおもわれます。右近の称号を解かれたのちは、雅号として『秋風』『秋翁』を用います。歌枕に詠まれる白河ゆかりの、定信、松尾芭蕉に憧れる文人「秋風」としては、これ程気持ちが昂る暮らしはなかったのではないのでしょうか。

一方、藩士としての秋風と、「十六ささげ」にまつわる関係性は、過去の南北朝の動乱になぞらえていたふしがあります。それは、藩論をまとめ「十六ささげ」隊が目指した決戦の地を阿部家の分領・保原陣屋がある霊山を予定していたと考えられるからです。しかしそれは、内膳の死で叶いませんでした。



『秋風筆 四季の句』旧棚倉藩士 中島久家文書群より



『明治期の桑折駅から保原、霊山への地図』

【終わりに】「十六捧げ」が対峙した正外とは

約三百年続いた徳川幕府の末期。往時は諸外国から兵庫開港要求、朝廷からは攘夷指示と、政局は混乱を極めていました。

時の将軍、徳川家茂。その傍で幕府老中職にあり、外国や朝廷とも交渉の最前線にいたのが名門譜代（老中格）の陸奥白河藩主・阿部正外です。幕閣老中になるには血筋と能力が重要視されるため、御三家の紀州徳川家や同格大名家や、宗家の備後福山藩阿部家からの養嗣子として、藩主を迎え入れ藩首脳陣は対策してきました。しかし幕閣老中就任を期待する譜代家老衆や宗家の思いは、残念ながら九代（七代目正敏から十五代正耆）に渡り叶うことはありませんでした。

阿部家十五代、白河藩主・正耆時代の文久三年四月。藩に江戸府内警衛要請がありました。担当老中は小笠原長行。この時の北町奉行佐々木飛騨守は二十日程で転属。後任に就いたのは阿部家分家旗本三千石で越前守だった頃の正外です。この警衛時にまとめられた『浪士連名控』に、白河藩江戸詰足軽小頭から脱藩浪士になったばかりの沖田林太郎、義弟総司がいます。のちの新選組、日野近藤道場面々の姓名が年齢と共に記録されています。この後、浪士一行の警戒要請で向かった大阪・京都においても白河藩士達は幕政に関わっています。

神奈川奉行・外国奉行時代には長州藩による異国船攻撃や、薩摩の生麦事件等、幕末の実務者として正外は多忙を極めました。

しかし、大名就任後に白河から動員されたエリート藩士達の活躍は、今もあまり知られてはいません。

正外の実弟・邦之助は沼津兵学校前身からの軍事講師で、正外自身も当時唯一の幕府開国先オランダから兵学知識を学び、第一次長州征伐と外交問題を同時進行で対応する程の実力者です。最新兵器は船で輸送する準備を

しており、西洋砲師範を新規採用（慶応元年 福村繁次郎）し、洋式軍事訓練も進めていました。

そんな最中の老中罷免、国元蟄居謹慎の沙汰でした。後に小笠原長行も幕閣を去ります。この二件の背景には鳥羽伏見の戦いで官軍と対戦し、兵を置き去りにして江戸へ逃げ帰った将軍 徳川慶喜、京都

守護職 松平容保、京都所司代 松平定敬らの関与がありました。そして朝廷工作の結果、有能な二人を幕政から退かせました。御三家の水戸家、御三卿の一橋家、御家門の會津松平家、譜代老中格の桑名藩久松松平家の彼らは、序列では確かに最強の布陣との評価もされますが、さらなる研究や新たな資料の発見が待たれます。

国政の最前線で奮闘し、朝廷や外国とも渡り合った二人が再会を果たした棚倉城下。武士は後に身分をうしない、奇しくもかたちを変えて命をつなげてきました。この地が、幕末維新の中心人物達が活躍した名残りとどめていることに意義を感じます。

《参考文献》

『戊辰白河口戦争記 復刻』佐久間律堂著 訳注 井上幸雄 金子誠三

『広報げいせい 歴史発見志士平川光伸・二つの歴史』

（高知県安芸郡芸西村 門脇鎌久著）

『旧石城郡田人村小史』

（福島県いわき市 たびとふるさと教室）

『旧棚倉藩士 中島久家文書群 明治元辰年十一月

羽州山ノ辺辰六月廿四日棚倉城落後引揚者控』

『旧棚倉藩士 中島久家文書群 明治期の桑折駅から 保原、霊山の地図』

『旧棚倉藩士 中島久家文書群 秋風筆 四季の句』

『旧棚倉藩士 中島久家文書群 明治44年棚倉町

『亀ヶ城公園鎮座鎮護神拝殿建築記念葉書』

（棚倉町 藤田大門家 個人蔵）

『石川地方の寺院めぐり』

（石川地方仏教会 編集委員会）

『講演集 関の白秋－文人松平定信の「奥の細道」』

（橋本登行著）

『白河楽翁 松平定信公小伝／昭和58年』

（山本敏夫著）

『結城宗廣公を偲ぶ／昭和12年』

（忠烈碑建碑会 代表 圓谷光衛著）

『白川城主 結城宗廣公略伝・小伝／昭和62年』

（白河市収入役 川瀬榮一著）

『由緒書覚』

（学習院大学 阿部家家臣索引）

『阿部氏分限帳』

（棚倉町史 阿部氏御家中順帳）

『旧棚倉藩主阿部氏家臣禄高覚帳』

（棚倉図書館）

『川澄次是著 公餘附録八 御家中諸土由緒拔書』

（学習院大学）

『家禄不足額給与願』

（棚倉図書館）

『明治の士族』

（高橋哲夫著）

『西郷村史 第2分冊』

（西郷村）

『薩摩藩家老の系譜』

（林匡著）

『北関東戊辰戦争』

（田辺昇吉著）

『東白川郡史』

（福島県郷土史叢刊）

『白河市史』

（白河市）

『棚倉町史』

（棚倉町）

『古殿町史』

（古殿町）

『保原町史』

『広報ほばら』

（保原町）

『山辺町史』

（山辺町）

『衆議院議員列傳』

（衆議院議員列傳発行所 山崎謙著）

『鹿児島県史料集 斉彬公史料』

（鹿児島県）

『小笠原壹岐守長行』

（小笠原壹岐守長行編纂会）

『平田家系譜』（平田重樹氏所有）

追記文献として（表1）（表2）（表3）（表4）（表5）

一瞬にして戊辰戦争を駆け抜けた

「十六ささげ」隊を調査する。

付記資料 (1) (2) (3) (4) (5)

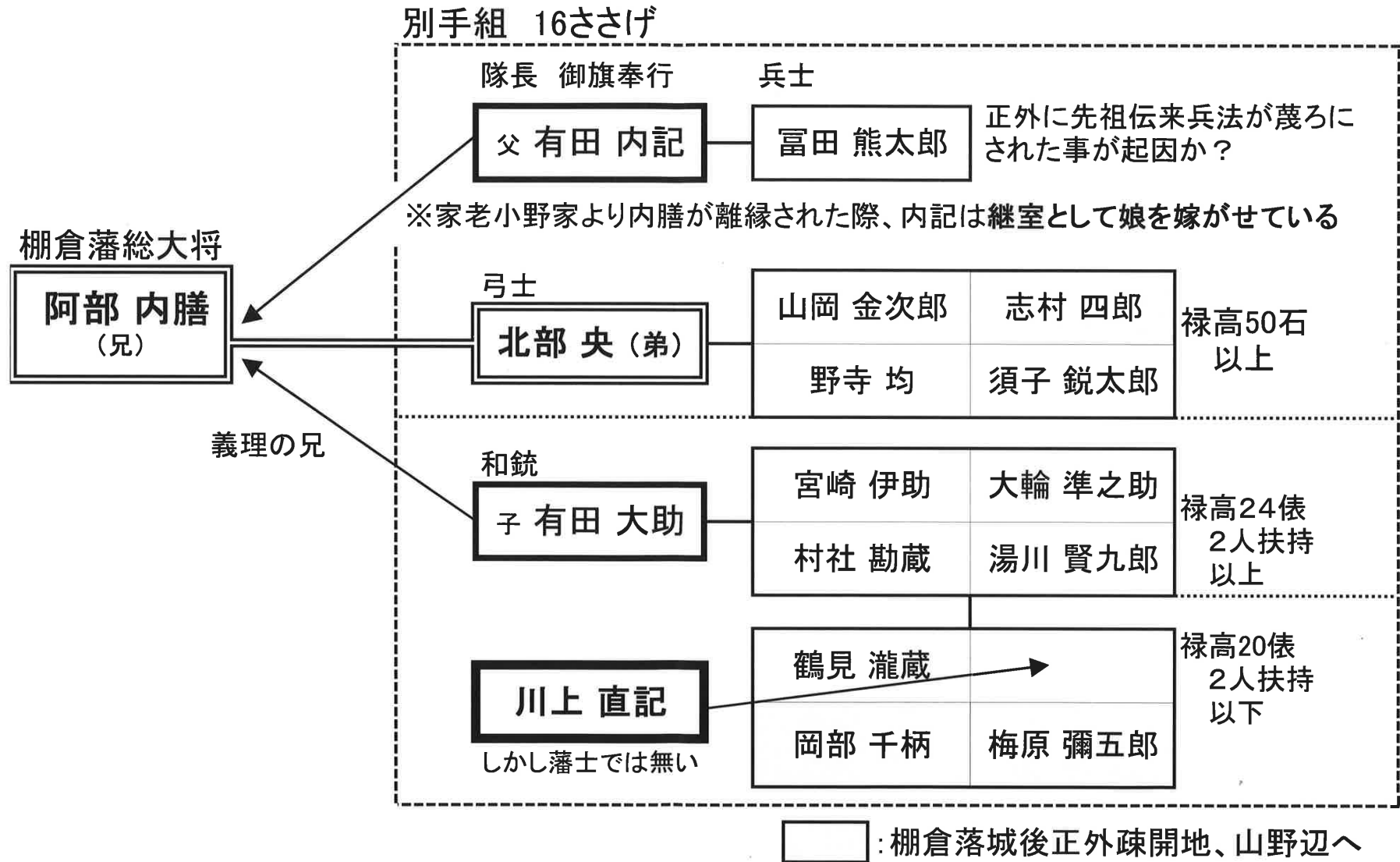
福島県地域創生総合支援事業

一般社団法人 ニフコ

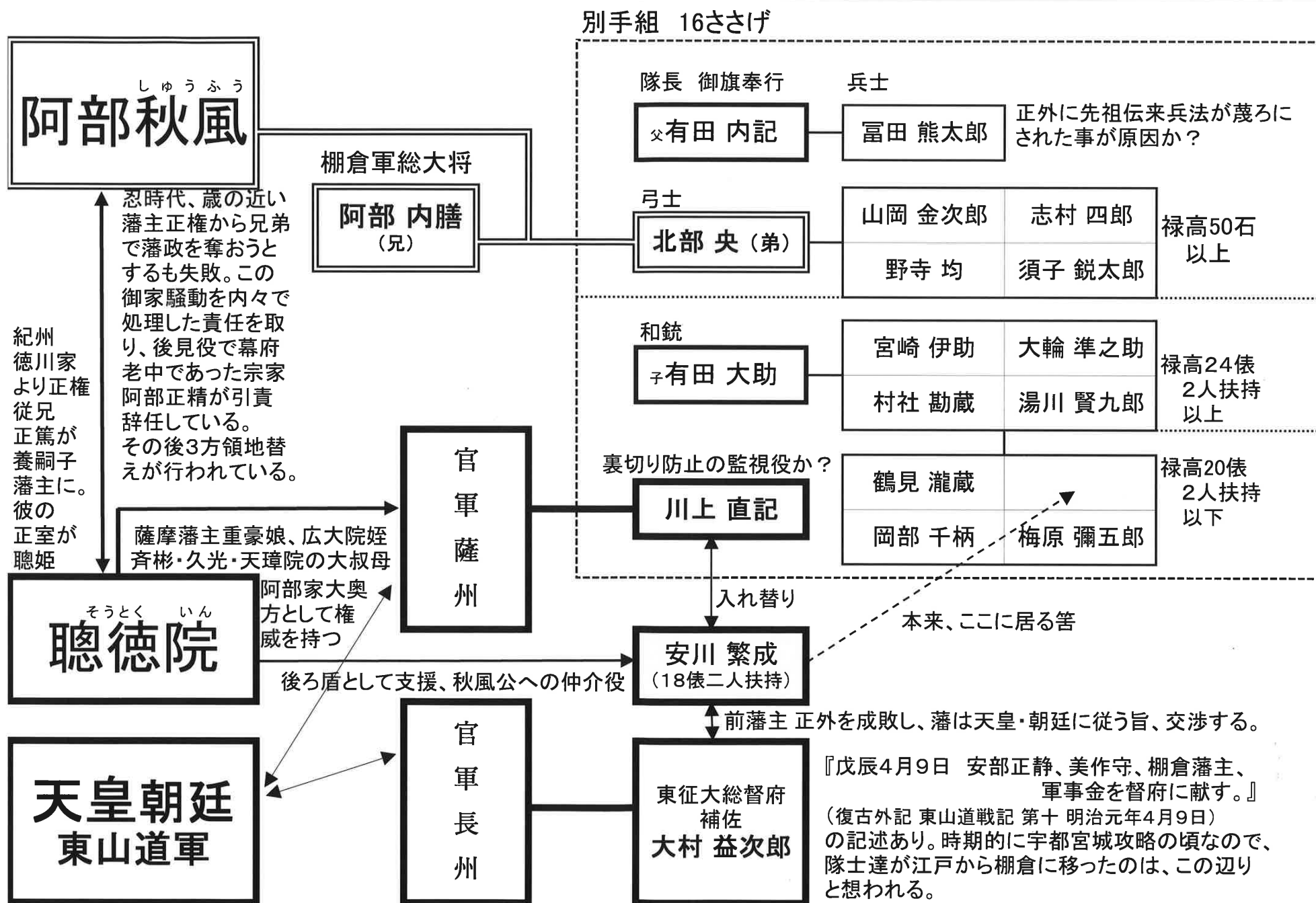
1 6 ささげ隊士にまつわる情報一覧（表1）

慶応4年4月25日 1868			天保8年 1837		慶応2年 1866		明治元年 1868		明治4年 1871		明治13年以降 1880以降		明治31年 1898		備考
棚倉進発軍 東白川郡史 ※大正8年(1919)9月発行			由緒書覚(藩士先祖書) ※家系普		阿部氏分限帳 ※白河から棚倉移封の頃		明治元辰年十一月羽州 山ノ辺辰六月廿四日 棚倉城落後引揚者控		旧棚倉藩主家臣禄高覚帳 ※棚倉景の頃		阿部内膳正熙 墓碑 謀建之者 ※右から年齢順		家禄不足額給与願 ※住所(地番除く)及び戸主		
					分限(身分)	家禄高			分限(身分)	家禄高					
	棚倉軍 総大将	あべないぜん 阿部内膳	7代藩主 阿部能登守 正敏から分家 初代 阿部内蔵允正健(正敏 三男) →2右近正脩(正健 六男・秋風) →3半之丞／内膳正熙(正脩 長男)	【軍務】 御者頭	400石	記載無し→戦没	記載無し →戦没	記載無し →戦没	刻記無し →自身のお墓	記載無し →戦没	白河移封から歴代養嗣子藩主に右近と称 され藩主一門城代家老であった秋風 を父とする。藩主 正外の祖父と秋風は 腹違いの兄弟。				
①	別手組 隊長	ありたないき 有田内記	浅野傳右衛門から分家 有田内記から分家 初代 有田斧右衛門→2内記→3内記 →4内記→5須右衛門→6内記	【政務】 御旗奉行	200石	記載無し	記載無し →隠居	記載無し →隠居	刻記無し →亡くなっている為	記載無し →亡くなっている為	有田家と藩主一門・阿部甚四郎家 (1200石／【軍務】御者頭)とは、初代 内記からの血の繋がりががある。娘は 内膳の継室。				
②	別手組 兵士	とみたくまたろう 富田熊太郎	初代 富田安兵衛→2安兵衛→3安兵衛 →4順右衛門→5順右衛門→6良助 →7熊太郎	【殿様付】 大殿様 (正外) 御近習	60石	記載無し	【殿様付】 御小納戸 (正功)	60石	刻記あり (9人中1番目) 富田熊太郎安敷	福島県安積郡九守村大字 安子島字一ノ谷 熊太郎改名亡安敷長男戸主 定之助	明治4年10月、下山本村に僑居 安積開拓地入植 棚倉藩士族、25名で棚倉開墾社を創立 し移住開墾願い出る。				
③	別手組 弓士	すごえいたろう 須子鋭太郎	須子八兵衛から分家 初代 須子平左衛門→2八兵衛 →3八兵衛→4八兵衛→5源八郎 →6源八→7鋭太郎	【軍務】 御使番	50石	記載無し	【政務】 遠州郡奉行 ※八之進	50石	刻記あり (9人中8番目) 須子鋭太郎信芳	福島県東白川郡高城村大字 植田字坂ノ下 倅、八之進改名戸主信直	この地より転居か。『福島師範女子部 卒業著名者調』第一回卒業生(明治24 年3月)に、『須子トミ』、婿は信之(旧 関根 亀次郎)。大正初期迄福島幼稚園へ勤務				
④	別手組 和銃士	ありただいすけ 有田大助	浅野傳右衛門から分家 有田内記分家 初代 有田斧右衛門→2内記→3内記 →4内記→5須右衛門→6内記→7大助	【軍務】 無足駕廻	金一枚 二人扶持	記載無し	【殿様付】 御近習頭 (正功)	200石	刻記あり (9人中7番目) 有田大助時一	福島県西白河郡矢吹村大字 矢吹字東側 大助改名戸主 輝時	明治4年10月、寺山村に僑居				
⑤	別手組 弓士	のでらひとし 野寺均	初代 野寺十兵衛→2千賀右衛門 →3十兵衛→4十兵衛→5十兵衛 →6●蔵→7均	【政務】 無足無役 +父【軍務】 御広間詰	一人扶持 +父60石	記載無し	【軍務】 御馬廻	60石	刻記あり (9人中3番目) 野寺均重則	東京市神田区駿河台南 甲賀町 亡●(金偏に冊)蔵長男重則 長男戸主 謙吉	(●印の漢字は、「金偏に冊」の1文字				
⑥	別手組 弓士	しむらしろう 志村四郎	初代 志村四郎右衛門→2四郎右衛門 →3八野右衛門→4四郎右衛門 →5八野右衛門→6四郎右衛門 →7四郎右衛門→8四郎	【軍務】 御本城番並 +父【軍務】 御使番	8俵 +父70石	落城後、父母と三人 で山ノ辺に疎開	【軍務】 御使番	70石	刻記無し	福島県田人村大字黒田字 別当 四郎改名戸主 重一	明治6年(1873)旧満照寺に明義小学校 を開設。教員一名(旧棚倉藩士志村重規 をもって生徒約三十名に対する教育を 開始する。				
⑦	別手組 弓士	やまおか きんじろう 山岡金次郎	初代 山岡三郎兵衛→2万右衛門 →3万右衛門→4三郎兵衛 →5三郎兵衛→6熊八郎→7万右衛門 →1次太夫→2金次郎	【軍務】 御本城番並 +父【軍務】 御馬廻	8俵 +父100石	記載無し	【政務】 御金奉行	100石	刻記あり (9人中4番目) 山岡金治郎直應	福島県東白川郡社川村大字 堤字羽黒東 金次郎改名戸主 直應	父の兄、万右衛門／130石他50石／ 【政務】町奉行				
⑧	別手組 和銃士	おおわじゆんのすけ 大輪準之助	初代 大輪権左衛門→2治右衛門 →3治右衛門→4治右衛門 →5治右衛門→6準之助	【政務】 無足無役	35俵 2人扶持	記載無し	【政務】 江戸勘定 奉行見習	35俵 2人扶持	刻記あり (9人中2番目) 大輪準之助朝成	福島県安積郡九守村大字 安子島字対面原番地未定 準之助改名亡朝成養子戸主 志津衛	安積開拓地入植 棚倉藩士族、25名で棚倉開墾社を創立 し移住開墾願い出る。				
⑨	別手組 弓士	あべとくしろう 阿部篤四郎 (北部央)	※天保8年時点では記載無し 初代 阿部内蔵允→2右近→3半之丞 →4北部央正元(内膳実舍弟 篤四郎)	【軍務】 御本城番並	8俵 +兄400石	記載無し	【殿様付】 物頭 (正功) 北部篤四郎	500石	刻記無し →央、明治13年 8月26日没	福島県西白河郡釜子字畑中 篤四郎改名央養子直則の 跡相続人戸主 ミキ	北部ミキは内膳と妾の娘。姉は森嘉種 の母。				
⑩	別手組 和銃士	おかべちから 岡部千柄 (鏡蔵)	初代 岡部権右衛門→2又市→3又市 →4又市→5又市→6又市→7又市	【軍務】 御本城番並 +兄【軍務】 御馬廻	8俵 +兄140石	落城後、母と金助の 三人で山ノ辺に疎開	記載無し	記載無し	刻記あり (9人中5番目) 岡部千柄	福島県安積郡九守村大字 安子島字対面原番地未定 又市改名戸主 壘平	安積開拓地入植 棚倉藩士族、25名で棚倉開墾社を創立 し移住開墾願い出る。				
⑪	別手組 和銃士	むらこそかんぞう 村社勘蔵	村社玄番より分家 初代 村社安右衛門→2幸右衛門 →3幸八→4喜左衛門→5勘六→6勘蔵	【政務】 御馬下乗	24俵 2人扶持	記載無し	【殿様付】 奥頭取 村社蕃	24俵 2人扶持	刻記あり (9人中9番目) 村社勘蔵篤弼	記載無し →村社姓で明治12年安達 郡書記任用、また安積開拓 地入植家もあり。	父 勘六々喜三郎は慶応3年11月から 保原陣屋の代官に急遽就任。				
⑫	別手組 和銃士	ゆかわけんくろう 湯川賢九郎	1湯川安進→2玄庵→3安信→4源治 分家→湯川源右衛門より分家 →初代 湯川源之助→2忠之助 →3源之助→4賢九郎	【軍務】 無足駕周	24俵 2人扶持	記載無し	【政務】 御金奉行	24俵 2人扶持	刻記無し	福島県石川郡石川町字下泉 賢九郎改名戸主 安	『湯川小三郎 他御家内4人』として、保原 陣屋領所沢村忠七家に辰7月1日より9月 29日の出立迄寄留。				
⑬	別手組 和銃士	みやざき いすけ 宮崎伊助	奎兵衛より分家 廣右衛門より分家 初代 宮崎伊助→2伊助→3仙之助	【政務】 御馬下乗 見習	35俵 2人扶持	記載無し	【殿様付】 江戸奥頭取	35俵 2人扶持	刻記無し	福島県東白川郡近津村大字 八槻字柳町 伊助改名戸主 義任					
⑭	別手組 和銃士	うめはらやごろう 梅原彌五郎	※天保8年時点では記載無し 藩士御帳付初代(新規採用)	記載無し	5人扶持	落城後、妻と二人で 山ノ辺に疎開	記載無し	記載無し	刻記無し	福島県安積郡喜久田村大字 堀ノ内字外左衛門段 彌五郎改名辰雄弟戸主 金作	安積開拓地入植 棚倉藩士族、25名で棚倉開墾社を創立 し移住開墾願い出る。				
⑮	別手組 和銃士	つるみたまきぞう 鶴見瀧蔵	初代 鶴見彦左衛門→2喜兵衛 →3半左エ門→4半左エ門→5喜兵衛 →6数助→7瀧蔵	【政務】 御徒無役 御目見以下	20俵 2人扶持	記載無し	記載無し	記載無し	刻記無し	福島県西白河郡西郷村大字 小田倉字上上野原 瀧蔵改名戸主 称	小田倉開墾地入植 明治17年7月には鶴見称・菊池徳之助 の二戸、八月宮田広吉、(11)				
⑯	別手組 和銃士	かわかみなおき 川上直記	記載無し	記載無し	記載無し	記載無し	記載無し	記載無し	刻記あり (9人中6番) 川上直記名興	記載無し	古殿町史 旧小見川藩仙石陣屋記録に 記載あり。藩士ではなく、単身平潟方面 へ6/24棚倉城攻撃以前に向かっている。				

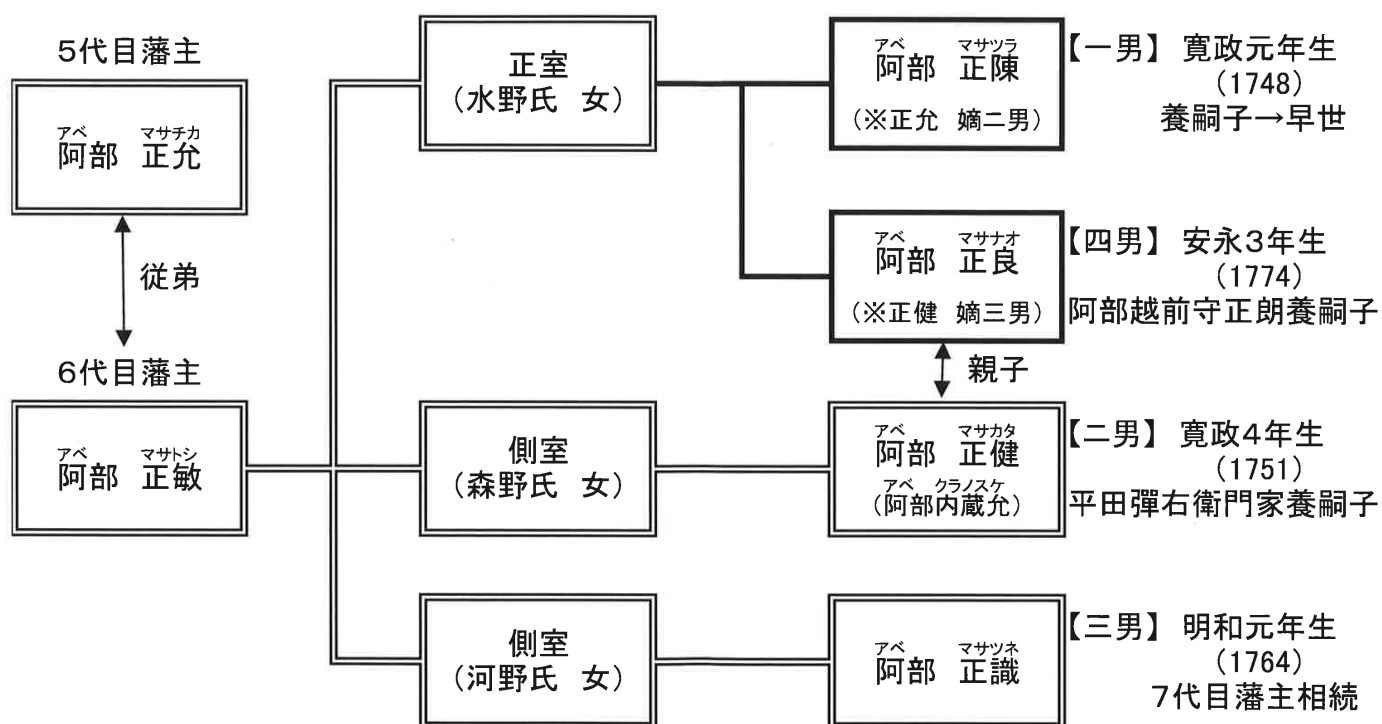
別手組 16ささげ 家禄高別仕分(表2)



慶応4年5月1日白河戦争直前の藩内、官軍 及び 16ささげ 関係図(表3)



阿部正敏から正健への家系譜（表4）



宗家 阿部忠吉から正外・内膳迄の家系譜（表5）

